

概 説



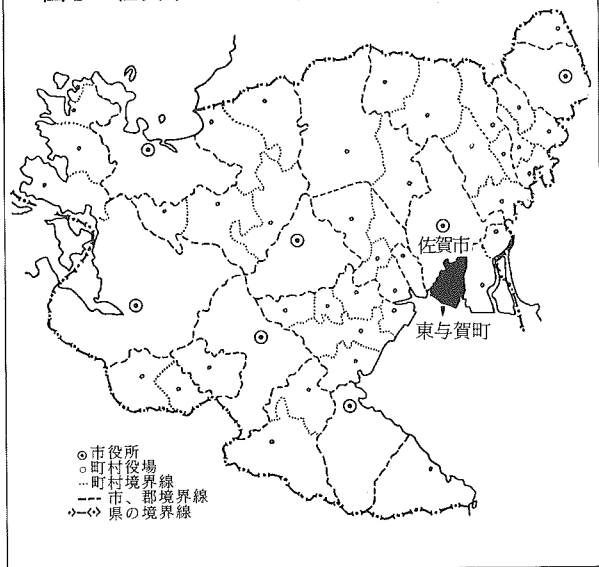
海明有の潟とさるふ

一 東与賀町の概要と沿革

(一) 概要と景観

明治時代の小学校教科書に「肥前ノ佐賀ニ至ル、此辺ハ一面ノ平地ニシテ、田圃開ケ、沃野ノ広キコト九州ニ冠タリ」と。この一節はまた東与賀町付近の地理を端的に表現している。野田成亮は文化九年（一八一二）『日本九峰修行日記』に「扱此肥前の国は九州第一の広き国にて、佐賀の城下の辺至て平原の地也。東西南北六十里計高山なし、少しの岡もなし、皆々田地にて村々繁昌せり。……眺望は大空の青雲計り横目は唯村々の竹木の梢計りを見る」と。ケンプエルの『江戸参府紀行』元禄四年（一六九一）に「此地方の周囲数里は土地肥沃平夷にして、（水路及び）河川（縦横）貫流し、諸所に水門ありて、何処（随意に水を給して）も水の中に没る様なり居て、灌漑のため稲田の作物は（生育速かに）頗る收穫多し。肥前国は、一言にて言へば加賀と共に日本第一の米穀の産地（日本国中にて最も豊饒なる地）なり」と。長崎街道を旅した人の眼に映じた佐賀平野は、広漠とした平坦な地形と、河川・溝渠や水門と、「見たせど尽きせぬ一眸千里の稲田」（吉田絃二郎『わが詩わが旅』）であった。北原白秋の明治四十四年（一九一一）『思ひ出』に「或は佐賀より筑後川の流を越えて、わが街に入り来る旅び

図1 佐賀県における東与賀町の位置



とはその周囲の大平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであろう。さうして歩むにつれて、その水面の随所に、菱の葉、蓮、真菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様々の浮藻の熾烈な更紗模様の中に微かな濃紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう」このような水郷景観は、戦前の東与賀にも随所に見られた風物であったが、昭和四十一年に始まった圃場整備の完成によって、その面影は薄れている。筑紫野の青田の続く遙か彼方、青垣山の連なる中でひととき秀でた天山や脊振の山なみ。南には不知火燃える有明海。稲田の実り、海の幸に恵まれた東与賀町である。この里を造り固めたわが祖先は、安住の地をここと定めて開拓に命を打ち込んだ。そこには泥濘膝を没する重粘土の中で、泥と汗にまみれながら生れたばかりの土地に刻みこんだ堀割があり、また度重なる失敗にもめげず構築した潮止め堤防があった。

このように骨身を削って築かれた土地。先祖代々踏み継がれた足跡にわが足を重ね、近隣の村人どおし互いに親睦を深め合いながら、東与賀の平和郷は成立したのである。今日、機械という偉大な魔力のもとで、原初的な田圃や水路の景観は一変したが、大地に立脚し、先人から継承した勤労精神と文化を、近代化の中に創造していかなければならない。

東与賀町は三角州を形成している佐賀平野の中南部にあり、有明海北岸地域の一部を形成している。土壌は軟弱な重粘土の埴土から成り、地味肥沃、開拓以来水稻栽培を中心として、全国有数の高水準の米作地域となっている。最近では、水田裏作としての二条大麦（ビール麦）も飛躍的に増産、またハウス栽培も盛んとなり、転作の目玉として躍進を続けるイチゴは東京市場において名声を高め、その他ナス、メロン、水田ブドウも一部で行わ

れる。なお佐賀平坦地における水田酪農発祥の地でユニークな経営がなされている。

一方、有明海沿岸では干潟漁業から脱皮して、戦後ノリ養殖業がブームとなり、有明海域全体のノリ生産は日本一となっている。このような第一次産業の優位に比して、第二次産業（鍛冶屋ではかつて釘造りの特産があった）、第三次産業に見るべきものがなく、隣接する佐賀市をはじめ他地域に依存しなければならない。また歴史が

新しい本町は、史跡・観光などの資源もないため、人をひきつける魅力がない。『佐賀郡誌』に「此地もと小津郷の海浜なりしを埋築せし新開地なれば、名勝古跡として一つも記す可き者なく」と述べてある。東与賀町を行政上からみれば、佐賀県のやや南東部、佐賀郡の南部三町のうち、川副町と久保田町との中間に位置し、北は県政の中心佐賀市に隣接している。東与賀は発生以来、城下町佐賀市と政治、産業経済、交通運輸、教育文化、また住民は市を「ノンボイ」と称して、水利関係や日常生活面などにおいて切り離すことのできない密接な関係をもっている。

統計からみた

◆ 専業・兼業別農家数の推移

(単位 戸)

年 度	総農家数	専業農家	兼 業 農 家		
			第 1 種 (農業が主)	第 2 種 (兼業が主)	計
昭和40年	931	170	433	328	761
45年	930	127	445	358	803
50年	812	72	335	405	740
55年	702	104	301	297	598

◆ 農業機械台数

(単位 台)

年 度	動力耕耘機 農用トラクター	動力噴霧機	動力散粉機	バインダー	自脱型コバイン	米麦用乾燥機	動力田植機
昭和52年	724	290	343	363	365	508	496
53年	707	310	359	278	392	485	522
54年	698	312	360	266	372	458	513
55年	753	333	363	272	409	406	582

◆ 海苔養殖業戸数

(単位 戸)

昭和51年	52年	53年	54年	55年
185	187	182	180	180

◆ 漁船隻数

(単位 隻)

年 度	昭和51年	52年	53年	54年	55年
無動力船	263	398	384	436	433
船外機付船	60	53	30	62	57
動力船	186	188	173	214	172
計	509	639	587	712	662

東与賀町の概要

◆ 地目別面積

(昭和56年1月1日)

区 分	総 数	田	畑	宅 地	そ の 他
面 積 (ha)	1,537	1,120	13	69	335
割 合 (%)	100.00	72.87	0.85	4.49	21.79

資料：町税務課

◆ 産業別就業者(15歳以上就業者)

産 業	昭和40年度		昭和45年度		昭和50年度		昭和55年度		
	就業者 (人)	比 率 (%)	就業者 (人)	比 率 (%)	就業者 (人)	比 率 (%)	就業者 (人)	比 率 (%)	
第一産業	農 業	1,819	56.4	1,631	47.8	1,585	47.5	930 ^(内林業1)	28.8
	漁業・水産養殖業	321	10.0	380	11.1	374	11.2	421	13.0
	計	2,140	66.4	2,011	58.9	1,959	58.7	1,351	41.8
第二産業	鉱 業	0		0		0		1	0
	建 設 業	122	3.8	173	5.1	170	5.1	312	9.7
	製 造 業	232	7.2	249	7.3	246	7.4	247	7.6
	計	354	11.0	422	12.4	416	12.5	560	17.3
第三産業	卸売・小売業	280	8.7	388	11.4	381	11.4	547	16.9
	金融・保険・不動産業	24	0.7	52	1.5	50	1.5	63	2.0
	運輸・通信業	80	2.5	104	3.0	103	3.0	123	3.8
	電気・ガス・水道業	20	0.6	26	0.8	26	0.8	24	0.8
	サービス業	239	7.4	289	8.5	284	8.5	429	13.3
	公 務	84	2.6	121	3.5	119	3.6	133	4.1
	分類不能	3	0.1	0		0		0	
計	730	22.6	980	28.7	963	28.8	1,319	40.9	
総 計	3,224	100.0	3,413	100.0	3,338	100.0	3,230	100.0	

資料：国勢調査

筑後川や嘉瀬川などによって運搬された微細な土砂は、遠浅で日本一の潮汐干満しやうまんの差をもつ有明海沿岸に堆積

した。東与賀の歴史は干拓の歴史である。東与賀が自然的にまた人為的に陸化された初めが何時の時代か明瞭でないが、戦国時代末期（一六〇〇ごろ）には、作土居——住吉——大野を結ぶ線が海岸線と考えられている。しかし、三八〇年前ごろの『慶長年中肥前国絵図』（二五九六一六一四）に描かれた最南の集落は、鹿子——飯盛（本庄町上飯盛）となっている。また『正保四年肥前国絵図』（一六四七）には、立野村・実久村・下古賀村・田中村・下飯盛村がでてゐる。更に約二八〇年前の『元禄十四年肥前国絵図』（一七〇二）になると、住吉・大野が現われる。その南方にある潮止め大堤塘たいていとうの松土居の築造年代は、約三五〇—三一〇年前の寛永・寛文年間（一六四〇—一六七〇ごろ）と推定されている。この松土居（ウーデー）外側には鱗状りんじょうの小搦が数多あまた付属する。

明治・大正時代になると、第二線堤塘たいていとう内に大搦・授産社搦・年徳外搦ができたが、入植者はなかつた。昭和になると、九年に大授搦、十年に戊申搦しゆんとうが竣工し、遅れて第二戊申搦が三十八年に完工した。こうして本町の面積・耕地面積も増加し、今日では水田面積が一、一二〇畝となっている。なお、佐賀干拓（東与賀地先九八三畝、久保田地先一〇七畝、計一〇九〇畝）が予定されていたが、米減反の折から立ち消えとなっている。

(二) 沿 革

江戸時代、佐賀藩は行政上、郡の中に郷を置き、その数カ所の郷をまとめて代官が支配していた。たとえば佐賀郡では与賀上郷・与賀下郷など十余の郷があつた。与賀下郷は当時東与賀の全域と西与賀の南半が含まれる。

佐賀郡内では元禄三年（二六九〇）に五代官（与賀上郷・下郷、その他四）、宝永六年（一七〇九）に三代官（与賀上郷・下郷・巨勢郷、その他二）、弘化三年（一八四六）に三代官（与賀・上佐賀・川副）となっている。

次に与賀下郷の部落名について記す。

貞享四年（一六八七）改めの『郷村帳』

○立野村・新ヶ江村 ○実久村・上町・鍛冶屋村 ○下古賀村・作り出村 ○田中村・上古賀村・新村 ○中飯盛村・本相応村 ○下飯盛村・新村（住吉村） ○大野村。他に二村六津：○高太郎村 ○丸目村 ○相応津 ○丸目新津 ○鹿子船津 ○実久新津 ○与賀船津 ○今町
天明三年（一七八三）万延元年（一八六〇）改め『郷村帳』

○立野村・新ヶ江・坂田小路 ○実久村・上町・鍛冶屋・島ノ内 ○下古賀村・作出・今町・平八搦 ○田中村・上古賀・新村・作り出 ○中飯盛村・大屋敷小路・江副小路・辻小路 ○下飯盛村・長八小路・石丸小路・山田小路・道手小路 ○住吉村・中村 ○大野村 ○高太郎村 ○丸目村 ○元相応村（津の六所は貞享郷村帳と同じ）

天明七年（一七八七）『佐嘉領村々目録』

○立野村（五七一・六四八石） 実久村（九七二・九五二） 下古賀村（一二七九・二〇四） 田中村（八三五・四六二） 下飯盛村（一八七二・八六〇）

○立野村（一八〇二）『御領中郡村附』

○立野村・新ヶ江・坂田小路 ○実久村・鍛冶屋古賀・島ノ内 ○上町村 ○下古賀村・作り出・今町・平八搦

○上古賀村 ○田中村・新村・作り出 ○中飯盛(小路名、天明三年に同じ) ○下飯盛村(小路名、天明三年

に同じ) ○住吉村・中村 ○大野村 ○高太郎村 ○元相応村 ○丸目村(今津御番所) ○鹿子船津 ○与

賀船津・今町 ○相応上町 ○相応下町

天保九年(二八三八)『御蔵入地米郷村附』

○立野村(五八一・五八八石) ○実久村(七四七・五六四) ○下古賀村(二〇四二・二八八) ○田中村(九
七五・九一六) ○中飯盛村(七八二・六九二) ○下飯盛村(七一四・五六七) ○住吉村(七一五・三八六) ○
大野村(七〇〇・九七二) ○元相応村(四三〇・七〇八) ○丸目村(五八三・四五四) ○高太郎村(八三四・
八〇二) 合計八一〇九・八三五石

明治四年(一八七二)四月五日『戸籍法発布』

県下を三十四大区、七十八小区に区分、大区に戸長・副戸長を置いた。うち佐賀郡は六番大区から十四番大区
まで。その中、十三番大区は、

①一番小区 戸数千三十四戸、地米八千四百二十石二斗二升八合

与賀下郷(下古賀村 田中村 飯盛村 高太郎村 相応津 鹿子船津)

②二番小区 与賀上郷(戸・地米・村町は省略)

明治七年六月『肥前国佐賀県管内各区郡村市坊等取調帳』

第十四大区 肥前国佐賀郡

第一小区 本村四ヶ村 但シ枝村八ヶ村、一ヶ津。

○高太郎村 元相応村 丸目村

一ヶ津 二ヶ町

○下古賀村 鹿子船津 立野村 実久村

○相応津 上町 下町

○田中村 住吉村

○飯盛村 中飯盛村 下飯盛村 大野村

明治九年九月八日 長崎県佐賀郡

第四十六区 三小区

○下古賀村 (内)与賀船津 鹿子船津 立野村 実久村 下古賀村

○飯盛村 (内)中飯盛村 下飯盛村 大野村

○田中村 (内)田中村 住吉村

○高太郎村 鹿子村 相応村 厘外村 末次村 有重村

明治十一年七月二十二日 郡区町村編制法の公布。大区・小区制は廃止され、郡・町・村となる。同年十月二十
八日 長崎県達甲一二一号の『布達別紙』によると、佐賀郡内一円に「七十九ヶ村 二十町」が置かれ、佐賀町
に郡役所を置き事務を取扱った。現、東与賀関係のものに、下古賀村・田中村・飯盛村がある。

※県名の改称変更

明治四・七・一四 廃藩置県……佐賀県・蓮池県・小城県・鹿島県・唐津県

〃四・九・四 伊万里県

〃五・五・二九 佐賀県(対馬・壱岐を含む)

沿

表1 東与賀町字別戸数人口数

(昭和9年、56年)(△は減)

大字名	字名	戸数		世帯数		人口(人)		人口増減
		昭和9年	昭56.3.31	昭和9年	昭56.3.31	昭和9年	昭56.3.31	
下古賀	立野	40	85	196	328	132		
	実久	}	43	}	165	95		
	鍛冶屋		31		24		167	97
	上町	18	20	107	82	△25		
	船津北	}	29	}	322	△84		
	船津南		67		31		109	129
	下古賀	24	90	150	361	211		
	今町東	}	81	}	657	125		
	今町西		118		73		418	364
	中割	21	24	122	111	△11		
	搦東	}	67	}	542	170		
	搦西		90		94		299	413
梅田	-	35	-	160	160			
田中	上古賀	16	27	91	120	29		
	田中	17	26	88	121	33		
	作出	47	93	233	404	171		
	新村	29	53	184	231	47		
	中村	40	67	252	344	92		
	住吉東	}	77	}	473	135		
	住吉西		81		54		362	246
大授一	}	22	}	147	181			
大授二		33		30		101	152	
大授三		17		75		75		
飯盛	中飯盛	41	46	225	215	△10		
	下飯盛	66	82	375	364	△11		
	大野一	}	61	}	942	94		
	大野二		161		69		285	318
	大野三		72		315			
大野西	29		118					
東与賀町	計	940	1,521	5,273	6,807	1,534		
				男 2,667	男 3,259	男 592		
				女 2,606	女 3,548	女 942		

明治五・八・一七 対馬・杵岐を長崎県に移管
 〃 九・四・一八 三瀧^{みづま}県に合併
 〃 九・五・二四 松浦郡・杵島郡
 〃 九・六・二一 藤津郡 } 長崎県に編入
 〃 九・八・二一 三瀧県廃され、佐賀・小城・三根・養父・基肄の各郡も長崎県に編入
 〃 一六・五・九 佐賀県(現区域)、長崎県より分離独立
 明治十七年 郡内町村区域 二十七、その九に、下古賀村、田中村、飯盛村 がある。
 明治二十二年三月二十三日 市町村制施行(佐賀郡内に三十三カ村) 同年四月一日 町村制実施と共に、町部は市制となり佐賀郡の管轄を脱し、郡内各村の合併を行って二十三カ村となり、各村に村役場を設置し、村長・助役・収入役各一名、書記若干名を定めて村自治の行政に当たらせ、各部落には常設委員を置くこととなった。
 その中、
 「東与賀村」下古賀 飯盛 田中、 村長 古賀助作
 昭和四十一年十月一日 町制施行「東与賀町」